

言いにくい話を書きました

—合格保証に向かわせた真の理由—

ぜひ最後までお読みください。

2026.1.27 改訂

ROOT 清和 教務 西田博之

## はじめに

1人ひとりの生徒がどのように勉強すれば、どのくらいの期間で志望校に合格できるようになると明示出来てこそ堂々と胸を張って進学塾と言えるのではないのでしょうか。

また一方、保護者がせっせと我が子を塾に通わせるのは、ここで勉強すれば我が子も合格してくれるだろうという期待があるからでしょう。だからこそ、塾選びは家から一番近いからという理由よりも、評判が良いからという基準で通う塾を選んでいるのが一般的でしょう。そこで、わが子を行かせたい中学にどのくらいの人数が合格しているのだろうかとか、何年生から通わせればいいのか、というようなことが気になってしまいます。さらに、通う塾を決めていてもあっちの塾の良い評判を聞けば心が動いてしまうものです。

### 合格保証

車を買っても家を建てても電化製品を買っても保証が付くのは当たり前の時代になって久しいのに、三大聖職と言われてきた医師・僧侶・教師（弁護士）は保証の二文字には背を向けていてもそれは当然と思われてきました。お坊さんは保証する対象を見つけにくいでしょうし、医師もまだまだ解明されていない未知の生体の神秘の部分が多すぎるので、快復や治癒の度合いを保証することは無理なのかもしれません。教育の世界も、1人ひとりの生徒の能力の差や体力や気力や環境や遺伝子の違いによって画一的に学習と指導の成果を予想することは不可能とされてきました。

教育という大きな世界では保証はむずかしくとも、中学受験に限定して合格を保証できれば、進学塾という仕事はとても楽しいものになるだろうと思えます。

お金の問題ではありません。教える側と教えてもらう側の関係の問題です。教える側が学習と指導の成果を保証してあげることが、生徒や保護者をどれほど安心させ、元気づけ、自信をもってやる気にさせ、まっしぐらに学習に専念させることになることを経験してきました。想像すらしていなかったこともおこります。生徒の心の奥底に、小さな灯りが突然点火され、次第に大きな炎となって燃え盛り、意欲と情熱を燃やして大きく成長していく過程に驚き、呆然と眺めることが多々おこります。

保証は保証する側に勇気と覚悟と経験を必要とします。「・・・に合格できなかつたら入会に遡って月謝を全額返却します」等の保証をすることは、冷静にして賢明な多くの塾長は自殺行為とお考えのようです。

細々と、ひっそりと、「合格できなければ月謝をお返ししますよ」と個人交渉して保証してきた“古き良き時代”は終焉を迎え、「合格を保証する」と堂々と ROOT 清和は宣言し、生徒を迎えることに躊躇なく踏み込みます。まずは高知県内の中学受験から合格を保証していきます。

## 勉強はひとりでやった方が伸びる

受験が近づくと「勉強は一人でやったほうが伸びる」というおぼろげに見え隠れしていたものが、受験期になると合格させたいという気持ちが先に立ち、生徒の将来の自立より目先の入試対策に追われ、その命題は忘れ去られてしまいつい教え込んでしまいます。受験が終わると少し反省するのですがやはり、受験期が来ると同じように教え込んでしまいます。

算数の文章題を一生懸命説明してあげると子どもたちは真剣に聞いています。苦しそうな顔、放心したような顔、輝く目、暗い目、さまざまな表情の中に、その子どもの理解度がうかがわれます。説明を終えて、あるいは説明しながら、“分かった？”“ここまで大丈夫？”と聞くとほとんどの子どもは“分かった”“大丈夫”と返事します。この“分かった”がクセ者で、分かり具合は百人百様の度合いがあります。一を聞いて十を知るとく深く分かって類似問題まで解けるようになった分かり方、だいたい分かった分かり方、“分かった”と言わなければ説明がまだまだ続きそうなので“分かった”と言う“分かった”まで、“分かる”の度合いは千差万別ということです。数多くの子どもを教えて言えることは、理解の深さはピンからキリまでであること、さらにピンとキリではまったく別の異質の内容をとらえている場合も少なからずあるということです。

勉強の効果は「質的結論」×「量的結論」で測ることができる。

「何をどのように進めれば無駄が少ないか…質的結論」「受験当日までに何をどれだけ進めればよいか…量的結論」この二つの積で「どこの学校の入学試験の合格点に達するか」が決まると言えます。

塾では新出単元の例題を一通り説明して、演習問題に進むのが一般的でしょう。例題の説明を聞いて“分かった”の度合いは前述のように様々です。様々な理解度の子どもに例題と同じような問題を解かせればその結果は想像できるように、すぐに解けて時間を持て余す子どももいれば、何をどうすればよいのか分からずじっと解答解説を待っている子ども、まったくお門違いの方向に進んでいる子どももいます。塾の1年間の最初の1時間の授業ですでにそのクラスの「量的結論」は崩れてしまいます。そこで、次回の授業までに遅くとも次の単元に入るまでに「量的結論」に見合った学習量に全員が達する手立てを講ずることになります。それが宿題です。宿題は10分程度で終わる子どももいれば何日もかかる子どももいるでしょう。ここで重要なことは、宿題には心静かに時間の制限なしに自分のペースでじっくり向かい合うことができることです。宿題の内容は初見ではないはずですが、単元も分かっていれば、理解の度合いは浅くとも解き方も見聞きしたことがある内容であるはずですが。うろ覚えの記憶や浅い理解の中でも、1人でじっくり心静かに向かい合うことでおおよそ解決できることが多いのです。勉強は一人でやるときに伸びるものです。授業は集会

にすぎません。授業で得た知識を自分一人で活用して初めて新しく学んだ知識は身につくものです。そして、真剣に心静かに取り組んだ問題が間違っていたことに気づいて、あるいは採点してもらって間違っていることに気づく、それからが本当の子どもひとり一人の勉強が始まります。

#### 短い授業時間と十分な質問時間

先に書いたように、授業は今まで知らなかったことを新しく知る集会にすぎません。勉強は新しく知ってそれを身につけることが勉強です。その授業が終わるまでに授業の内容を覚えてしまったり、完全に理解したりできる子どもは稀です。完全に理解していないことを自身で分かっている、そのことを気かけられる子どもが優秀な子どもです。ですから、優秀な子どもは、その新しい知識を使って問題を解いて解くことができ初めて安堵することができます。さらに、授業中の説明で気づいていなかったことも自分で発見してしまいます。一度身についた知識や理解は、生まれた時から知っていたようにいつ誰から教えてもらったかも分からなくなっているものです。

授業時間内の理解度は、先に書いたように百人百様です。生徒全員にある水準まで同程度の理解を求めるのは容易ではありません。情熱的な講師は一生懸命何度でも教えてくれるでしょう。しかし、それでは時間がいくらあっても足りませんし、「質的結論」の達成はできません。だからと言って、理解が浅い子どもを置き去りにはできませんし、しません。そのためにはまずは、子ども自身で整理して欲しいのです。そのツールが宿題です。心静かにじっくりと宿題に向かい合うことで整理できます。何を言っているのかというと、質問に来ても問題の内容を把握してない段階で質問に来る子どもは、往々にして解法の説明を聞いてもこちらが望んでいる理解は出来ないようです。算数の問題であれば算数的な意味が不明だから質問に来る訳ですからそれが把握できてなくても構わないのですが、国語的な意味も文章のストーリーも把握できていないのは、心静かに真剣に向き合っていないということです。

ROOT 清和では、授業時間と同等の時間を別途質問の時間として設けています。強制でもありませんし、費用もかかりません。問題を自力で解決していきたい子どもにはとても有意義な時間になっています。授業時間で知ったことを身につけていくことができる時間も百人百様です。短い時間で身につけられる子どもは、それなりの過去からの積み重ねがあるものです。ですから、時間の制限なく、心静かな学習に向き合える環境こそを提供できることも理想の学習塾の要素の一つになります。もちろんこの部分をご家庭で補える、さらに子どもが自ら学べるにこしたことはありません。

子どもが一人で心静かに学習に向き合うことからみると、授業は集会、先生は触媒にすぎません。

## 最高のトレーナー …宿題

これまで書いてきたように、宿題は ROOT 清和の指導のキモになります。毎回の宿題を満点になるまで何回でも直し提出する。これが ROOT 清和の第一のルールであり約束です。ROOT 清和では入会して以来すべての宿題の到達度の記録が残っています。4 年間で 320 回以上の宿題の記録が、提出しているかどうかはもちろん満点になるまでやり遂げたのか、何回やり直したのかまですべて記録として残っています。

---

「宿題を提出するまでは作業 (do)、まちがいを直す

ことから勉強(study)の始まり」

---

宿題は、家庭で勉強をする環境と習慣がある子どもなら 30 分もかからずに終わるようなものです。(もちろん、受験期の高学年の宿題は 30 分では終わりません。)

家庭で勉強する環境と習慣がない子どもは、質問の時間に来て勉強すれば解決します。心静かに落ち着いて勉強できる環境の中では、子どもからの質問はそう多くないのが現状です。その多くを自力で解決していきます。

小学 3 年生から始めると、中学入試を受けるまで 320 回分の宿題の小冊子(A4・4 枚程度)を確実にこなせばおよそ学力がつくことは想像できるでしょう。

子どもは心を持った有機体です。有機体であればこそ、宿題を完結するという子ども自身の努力によって裏付けされた自信が先の保証を予測させ、先の保証が見えてくれば、奮い立ち、緊張し、集中し、奇跡とも言える予想を遥かに上回った学習成果が生み出すのです。

生徒自身の努力の裏付けを持った合格保証は、生化学的に表現すれば、精神的な高揚→アドレナリン等活性ホルモンの分泌促進→脳細胞間の電流の交錯の激増→思考の強化と加速→学習能率増進→予想を上回る学習成果を実現できる原動力になるのです。

## 学力の根っこ (=ROOT) づくり

前に書いたように、1 人ひとりの生徒の能力や体力や気力や環境や遺伝子が違えば必然と差が出てくるものだろうと書きましたが、その中でも環境というものが大きな要素となっていることが優秀な子どもやさまざまな普通の子どもを観察していくうちに、少しずつ見えてきました。

「みなさん日本語を使わず何か考えてみてください。」これは、「論理エンジン」の序章に書

かれています。ですが、どうですか皆さんは何か考えられたでしょうか。日本語を母国語とする私たちにとって日本語がなければ何も考えることができないことに気づくでしょう。

優秀な子どもやさまざまな普通の子どもをみてきて同じ授業を聞き、同じ宿題をしても個人差が生まれる原因は広義の国語力（思考力・集中力・記憶力）の差・欠陥にあるようです。一方優秀な子どもが国語の学習を机に向かって学習しているかと言えばそうではないようです。

まず、学校・塾で学んだことは、頭の中で未使用の材料として詰め込まれる。その後、読書や全教科の学習、大人の会話を聞く、新聞・雑誌、テレビ・ラジオ・動画、平常の日常生活の中に氾濫している日本語の洪水の中で時を過ごすうちに、とりあえず詰め込み覚えた原材料（漢字・熟語・ことばの意味）が繰り返し思い出され、使われている間に微妙な発酵がはじまり、バラ、バラに孤立して詰め込まれていたものそれらの材料が融合し、その溶液全体の中から滲み出てくるものそれが待ち望んでいた理解力・思考力・記憶力・読解力（ほとんど国語力）であるようです。

私たちはこの広義の国語力を向上させる方法は、言葉の数を増やすことに重点を置いた地道な国語学習の永い永い連続以外にありえないこともはっきり証明され分かってきました。そのため、学力の根っこ（＝ROOT）づくりは永い年月、膨大な時間を要します。

## いつから始めればよいか

6年の夏休みまでにどうせやらなければならない受験学習を一通り終えてしまうような計画で今から進めたらどんなすばらしいことになるか、考えただけでも楽しいと思いませんか。目標は大きいほどやる気も増えるし、努力する際の苦痛など感じなくなるものです。“学習”が苦痛や忍耐と無縁になって、喜びと楽しさと希望に溢れるようになったとき、知的好奇心が自由に作動して学習する中身に心が、神経が集中するようになったとき、同じ時間学習しても、その効果は数倍、数十倍に増幅し、学習効果の累積が単なる量的な向上の域を超え、やがて質的な変化、学習に対する精神的な構えの根本的な変質を喚び起こすように作用します。トップクラスの子どもたちのほとんどが、学習の累積の経過の中で、何回か脱皮し、何回か壁を乗り越えて、その都度新しい別の世界を体験しつつ自分の学習領域を拡張、学習道具を磨き、昇り続けています。彼らにとって、学習は、もはや忍耐や辛抱の気配は微塵もなく、生活習慣であり、心躍る娯楽と化してしまっています。

各教科のからみ 記憶力・思考力・理解力…広義の国語力

国語の授業中に、理科の話題になったり、歴史の話が飛び出したり、地理が出てきたりROOT 清和の Beginner の授業ではよくあることです。ここでも、子どもの反応は様々です「また、先生が脱線し始めた」とばかりに休憩時間と考える子どももいれば、脱線している

ように見えても脱線のきっかけになった言葉や文と脱線の内容をどうにか結び付けようと、それまでの国語の授業以上に目を輝かせている子どもいます。脱線の最後に、なぜ脱線と思える話をしたのか、国語の言葉の意味を理解するためにどこが必要だったのか話すとき、休息时间と思っていた子どもには時間は戻りません。

国語は国語、算数は算数、理科は理科、社会は社会という認知から、意識的にまたは無意識に国語も算数も理科も社会も頭の中にごちゃごちゃ入っていき、それぞれが複雑な信号を出し合い、やがて有機体である人間の一部になっていく — これも学力であり広義の国語力と言えるのでしょう。高学年になればなるほど、授業の内容は難しくなっていきます、その時間の『学習のめあて』からはずれて知識や視野を広げる授業に発展させるのは時間的に難しくなります。

勉強したことが日常生活の中に氾濫していることばや知識の中にただ埋もれることなく頭の中で光や信号を出し存在をアピールできていき、それが光も信号も出さなくても有機体の一部になっていく。これにも、永い時間が必要になります。これらを身につけた子どもがいわゆる優秀な子どもと言えるのであれば、できるだけ低学年の内に身につけるべきと言えるでしょう。ROOT 清和では小学3年生から Beginner の授業に入れます。

国語は大地、算数はビル、理科・社会はお米

広義の国語力＝大地の上に算数のビルを建てます。大地（国語力）がしっかり固まっていないと大きく高いビルは建てられません。また、理科・社会は大地から栄養を吸収して育つ野菜のようなものです。（光合成に要する光は学習環境とか学習技術とか学習意欲とかその他の要素と考えましょう。）大地が肥沃であれば野菜の出来具合がよいのは当然です。これは、理科も社会を暗記科目として捉えている方には分かりやすいたとえです。しかし、受験は理科も社会も1年草の野菜では困ります。多年草の樹木として育てる必要があります。算数は、ビルの1階、2階が出来てないのに突然7階を作れないのと同じで順に下の階から積み上げて行かなければ7階部分は作れません。

ROOT 清和では、Beginner → Basic → Advanced → Expert と年数をかけて積み上げていくことで頑強な学力づくりを目指しています。

Beginner は塾名である、肥沃な大地に張り巡らせる大きな『根っこ』（＝ROOT）づくりを、次に Basic で丈夫な茎を育て、Advanced では太陽の恵みを十分に吸収できる葉を茂らせ、Expert で中学入試合格という大きな実を実らせるという4年間の長い過程に重きを置いた地道な指導をしてまいります。

合格を決める直前講習

ROOT 清和が進学塾と証明できるのは年末・年始の冬期直前講習でしょう。

直前講習では、普段の少ない通塾時間の中で子ども個々人が地道な努力で蓄えてきた学力を爆発させ、自分の力を試すかのように、12日間96時間に及ぶ講習時間を驚くほどの集

中力と精神力、そして体力で易々と乗り切っていきます。

これには頑強な学力の積み重ねがあってはじめてできることだと実感します。

小学 3 年生の頃のあどけなさは消え、甲子園の決勝を控えた球児の如くたくましさを見せてくれるのです。

## 最後に

ROOT 清和は、高知で最も少ない通塾日数と授業時間の中で、合格を保証し、学ぶ過程に責任を持ち、安心して努力に向き合える環境を提供し、合格しなければ責任をとろうという塾です。

宿題の完成率 90%以上なのに合格できなかった場合は、授業料を全額お返しします。これが ROOT 清和の合格保証制度です。

最後まで読んでいただきたかったのは、この心意気をご理解いただきたかったからです。

汲み取っていただけたら幸いです。ありがとうございました。